平成２１年３月１日発行

かまにし

第３１号

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔
大田区で第九演奏会を　山田皓一先生

東京都二十三区の中で大田区だけが、一度も大規模合唱団によるベートーベンの「第九」の演奏会が行われていないという事で、平成九年十月に山田皓一先生が発起人となり、「大田区第九を歌う会」が結成されました。

発足当初の団員数はわずか十名で、資金もなく、フリーマーケットで得たわずかな金を運営にあてるという苦労の連続だったそうです。

同じ時期、ＮＰＯ地雷除去支援の会（西蒲田八丁目）が、カンボジアの悲惨な状況の中での地雷除去で、やはり苦労されている話を聞きました。カンボジアの子供たちが地雷の脅威にさらされながら生きている。どこの国であろうと、子供たちを悲しい目に合わせてはならない。合唱団でも何か協力できることはないかと考え、地雷廃絶キャンペーンに積極的に参加しようという事になりました。

この地雷廃絶の呼びかけ運動が共感を得て、第九合唱団への参加者が徐々に増えていきました。

平成十一年四月四日、大田区初の総合ホールとして注目された、大田区民ホール・アプリコの開館記念の式典に於いて、二百八十名という合唱団が、大田区で初めての第九演奏を披露することになりました。

地雷の廃絶を願う気持ちが第九の歌声に共鳴し、多くの人々の心の中に浸透して成功を収めたのではないでしょうか。

この会は二年連続で演奏会を開き、平成十三年には、大田区議会主催の第一回平和祈念コンサートに二百五十名を超える大田区民中心の大合唱団として出演を果たしました。その後も山田皓一先生のご協力の下、毎年、終戦記念日の八月十五日には平和祈念コンサートが開催されています。

山田皓一先生のお父様、山田壮三さんは、音楽学校を卒業後、ＮＨＫ東京放送管弦楽団に所属するバイオリン奏者でした。太平洋戦争で陸軍に入隊し、シベリアに抑留されましたが、帰国後、東京放送管弦楽団に復帰して演奏活動を続けました。敗戦の失意、貧困により心のすさんだ人々に、音楽で希望を持ってもらいたいと、昭和二十七年に蒲田音楽文化教室を創立しました。それが今日の蒲田音楽学園の礎となりました。

お父様の意思を継がれた山田皓一先生は「幼児期はダイヤモンドの原石であるといっても過言ではない。資源の乏しい日本では乳幼児期の子供たちこそが、大切な資源です。心の教育、そして豊かな環境が必要です。」と、幼児教育への使命感に燃えていらっしゃいます。昨年の十二月には、久が原に新たな認可保育園を開園し、理事長に就任されました。

山田皓一先生は、現在も新たな理想の保育を目指し活躍中です。

（取材　石渡・柏村委員）

ご存知ですか　西蒲田・欣浄寺の針塚

針供養

針供養とは、針を供養する行事をいいます。針の使用を謹んで、針仕事を休み、古針を豆腐やこんにゃく、あるいは餅などに刺して、神社や寺院などで供養し、針塚に納めるか、川へ流すのが一般的であったといいます。柔らかいものに針を刺すことで、針に楽をさせ、今までの針の労に感謝するという意味で、芋、大根、にんじん、焼き豆腐、小豆などの煮物料理を食べます。俗に言う「いとこ煮」とか「六質汁」もこうした縁起からきたものだそうです。

針供養に似たことが中国にあり、それが日本に伝わり、事始め、事納めの行事と、女の守護神たる淡島神社などと相混合して、針供養になったと言われています。

欣浄寺針塚

西蒲田の欣浄寺（西蒲田四丁目十七番）に針塚があると聞き、訪ねてきました。

「以前は十二月八日の針供養の日には、この寺は大勢の人で賑わったそうです。しかし、二十年ほど前に、針供養の行事に一生懸命携わってくださった檀家さんが亡くなり、その後はこの行事の段取りをする人が誰もいなくなり、いつの間にか寂れてしまいました。」

以上は住職の安井昭雄（しょうゆう）さんから伺った話です。

欣浄寺の境内にはその時の鉢塚が今でも祀られています。また本堂に安置された『淡島明神像』は木造の九・五センチの小さなお像ですが、紀州加太浦の淡島神社から分霊された由緒あるお像です。

欣浄寺の針供養は毎年、十二月八日に行われていましたが、地域によっては、二月八日に行う所もありました。これは前に述べました事始めと事納めに関係しているようです。

日本人と「きもの」

「きもの」の歴史は縄文時代の貫頭衣にまでのぼりつき、平安時代の鮮やかな十二単のように花が開くような美しさを思い起こすことができます。日本の歴史の中で、「きもの」文化は私達と切り離すことができません。日本の民族衣装である「きもの」ですが、洋服の一般化によって着用する機会が減少していました。

しかし、最近ではアンティーク「きもの」や和柄の流行により、若い世代にも「きもの」人気が再燃しつつあるように感じられます。これからの新たな「きもの」文化に昔ながらの伝統的な作法を織り交ぜ、今後も日本の美しい「きもの」文化は発展していく事と思われます。

忘れ去られた針供養

ただし、現代の一般家庭で裁縫という行為そのものが日常から遠ざかってしまったことも事実です。針を持つのは取れたボタンを付けるときくらいでしょうか。職業の細分化が進み、和裁学校で専門技術を学び、昔の「お針子さん」がプロの資格を持つ「和裁技能士」という名前で呼ばれる時代になりました。

最近、針供養といえば、着付け教室へ通う若い娘さんたちによる派手なイベントとしてテレビで放映されることが多くなりました。神社、寺院での伝統的な針供養は少なくなってしまい、残念なことです。

（担当　柏村・石渡委員）

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

編集後記

三十号で特集いたしました「人間国宝・芹沢銈介」の記事について、数多くのご感想やお問い合わせを頂きました。また、十二月に区民ギャラリー蒲田西に展示された型染の作品も、出張所へお越しの折や、作品をご覧に足を運んでいただいた方など、多くの方々にご覧頂くことができました。本当に有難うございました。

今後も皆様に関心を持っていただける紙面作りをしていきたいと思っております。

読者の皆様からの投稿や、紙面に関するご意見、ご要望もお待ちしています。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，877人
	女	27，265人
	計	57，142人
世帯		30，707世帯

平成２１年２月１日現在

歴史・時代小説家 安部龍太郎

作家、安部龍太郎氏を紹介するに際し、最もふさわしい文章として、平成五年八月に発行された、新潮文庫『血の日本史』より、文芸評論家の縄田一男氏の巻末解説文の一部を引用させていただきます。

隆慶一郎が最後に会いたがった男

ご存知の様に、隆慶一郎は、昭和五十九年、『吉原御免状』でデビューして以来、『かくれさと苦界行』『影武者徳川家康』『捨て童子・松平忠輝』等の諸作で、伝奇小説の可能性を遮二無二追求しつつ、平成元年十一月、六十六歳で死去した、現在の歴史・時代小説活況の源をつくった〈花神〉的存在ともいえる書き手である。―中略―

安部龍太郎は、今までに、波浮（はぶ）の築港計画をめぐる権力抗争図を江戸・下田・大島が成す一大トライアングルの中に活写した快作『黄金海流』（平成三年十一月新潮社刊）や雑誌発表の好短編「バサラ」や「残された男」があり、ポスト隆慶一郎の最右翼と目されている。だが、本書『血の日本史』以前に商業誌で活字となったものは南北朝を扱った中短編「知謀の淵」「師直の恋」があるのみ。つまりは、当時、無名の新人であったわけだが、病床の隆慶一郎は、連載中の『血の日本史』を一読するや、編集者を枕辺に呼び、「この作家に会わせろ」といったという。二人の対面は隆の死によって実現しなかったが、あの隆慶一郎が最後に会いたがった男、という謂（い）いは、この若き俊英に寄せる期待の大きさを如実に示して余りある。―中略―

安部龍太郎を、一躍、スケールの大きい有力新人として斬界に知らしめたのが、この『血の日本史』への取り組みである。この「週刊新潮」の連作は、当初、安部龍太郎の作品として企画されたものではなかった。竜崎攻が第一回から十一回まで古代の権力抗争から平将門の乱を書き継ぐも、急遽、急病でダウン、安部龍太郎は急遽、ピンチヒッターとして狩り出されたのである。

―中略―

週刊誌一回分の読切、もしくは長くとも前後篇という制約があり、極端に少ない。しかもその中に確かな史観と人物造型、話の面白さ、短篇小説としての切れ、更には文学性までも盛り込まねばならない。正に至難の業といえるだろう。

だが、結果は〝吉〟と出た。初刊本の帯には麗々しく、〝歴史の分水嶺で敗れ去った悲劇の英雄群像、陰の血脈、46の短篇小説による日本通史　本邦初の壮挙！〟とも〝田沼は吝嗇で義仲は粗野、隆盛は温厚篤実―わが国時代小説百年の〈常識〉は、安部龍太郎の自在な筆捌きで、今まさに塗り変えられようとしている！〟とも記されているが、作品の内容はその惹句（じゃっく）と寸分違わぬ充実ぶりを示し、五日で史料を調べ二日で書くという一年間にわたる紙上の戦いは、安部龍太郎がこれから創作活動を展開していく上での四十六の歴史の扉をひらかせ、また、本書は、新人の第一著書にもかかわらず、山本周五郎賞の候補作となったのである。

―以下略

作家を志し上京

安部龍太郎氏は昭和三十年（1955）福岡県の八女郡に生まれました。国立久留米高専機械工学科を卒業、若い頃より同人誌等に作品を発表していましたが、昭和五十二年、作家になる夢を捨てきれずに上京。大田区職員として最初は矢口特別出張所に三年、その後、下丸子図書館に約五年間勤務しました。

当時は、ロシアの文豪ドストエフスキーに魅了された若い仲間たちとグループを作り、毎月一回の勉強会を開いていました。その勉強会では毎回ドストエフスキー作品を読み進め、あの大作群を二年で読了するほどでした。

ドストエフスキーに浸り続けているなかで、偶然にロシア文学者の江川卓氏と知り合えた事が、その後の安部龍太郎の文学活動に大きな影響をもたらしました。独学でロシア語を習得したという江川氏は懐の深い苦労人で、そのドストエフスキー論は作家志望の青年たちの心を掴み、夢中にさせる力がありました。彼の講演を聞き、彼の作品を読み、彼と語り合う中で、その洞察力の鋭さに感嘆し、ますます引き付けられていきました。

大田区役所を退職

昭和六十年（1985）大田区役所を二十八歳で退職し、作家をめざしましたが、現代小説に行き詰まり、歴史を題材とした小説に活路を見出しました。生まれ育ちが九州の山奥ということもあったせいか、現代社会には強烈な違和感を覚えるようになり、それを作品の中で表現する方法を見出すことが出来ず、歴史の中に日本人の真の姿を追い求めようとしたのでした。

「ロシアの急激な西洋化に反発し、土着的な信仰や思想に活路を見出そうとしたドストエフスキーの心情に通じるものがあったかもしれない」と自身の著書のなかで語っています。

下丸子図書館に勤務していた時に、郷土の歴史を紹介するコーナーを担当したことがあり、そこで地元と関係が深い新田義興の話を紹介することになりました。新田神社の宮司さんへの取材や、江戸時代になり松平家から奉納された「縁起絵巻」等を見せてもらい、その体験が、日本の歴史に興味を持つ一つのきっかけにもなりました。

小説『矢口の渡し』

退職後、初めて書いた歴史小説が『矢口の渡し』でした。これは図書館勤務時代に、役所の文芸誌に発表した作品を手直しをして「第六十七回オール読物新人賞」に応募したものです。現代小説では決して手の届かなかった新人賞最終候補にすんなりと残りました。次にはその続編として書かれた『智謀の淵』が第五回小説新潮新人賞の最終候補に選ばれ、初めて作家として認知され、小説新潮に掲載されたのは、翌年の昭和六十四年でした。

前編にあたる『矢口の渡し』は新田義興の側から書かれたものですが、続編として書かれた『智謀の淵』の主人公は竹沢右京亮。義貞亡き後も関東の雄として勢力を保つ新田義興を、たとえ卑怯な手段を用いたとはいえ討ち取ったからには英雄として扱われるはずでした。しかし右京亮の悲劇はここから始まります。策略を用いた負い目、周囲からの蔑みや過酷な仕打ちに遭い、ついに心も体も粉々に壊れていくという様が描かれています。

その後も、『彷徨える帝』では日本史の闇に封じ込められてきた〈後南朝時〉に大胆な切込みを示し、『関ヶ原連判状』ではわが国で唯一、『古今集』の秘伝を伝える〈古今伝授〉を司る男、細川幽斎が、関ヶ原合戦に朝廷を巻き込んでいく物語。その他『信長燃ゆ』『神々に告ぐ』等、南北朝から戦国時代にかけての歴史を、朝廷と幕府のしがらみという視点でとらえた大作を次々に発表してきました。

郷土の歴史を

雑誌編集者との対談で安部龍太郎氏は「歴史というのは常に勝者の側がつくるものですから、勝った側のいわば自己肯定のために編纂されたものじゃないですか。だから必ず負けた側は不当に扱われているんですよ。たとえば、秀頼や淀殿があんなに悪く書かれるのも、徳川時代はあの二人を良く書いたら本が出せなかったからです。」と語っています。

また「今の学校の歴史教育では郷土史って全くやらないでしょ。たとえば大田区に住んでいる人だったら、大田区の歴史をちゃんと認識すれば身近にある神社仏閣や史跡なんかに親しみやすいと思うんです。そんな教育をしないで郷土を愛する心を養おうというのは、おかしいと思っているんです」対談の最後をこのように閉めくくっています。

（取材　柏村・都築委員）

参考文献

『血の日本史』新潮文庫

『バサラ将軍』文春文庫

『そして作家になった』メディアパル

『おとなりさんインタビューVOL47』